



# 『Survival Through Design』の論考の主題にみる : リチャード・ノイトラの【時代認識】における《環境》と《文明》

末包, 伸吾

---

(Citation)

日本建築学会計画系論文集, 82(738):2113-2122

(Issue Date)

2017-08

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(Rights)

© 2017 日本建築学会

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90005239>



## 『Survival Through Design』の論考の主題にみる

リチャード・ノイトラの【時代認識】における《環境》と《文明》

STUDY ON RECOGNITION OF AGE ON ENVIRONMENT AND CIVILIZATION IN RICHARD  
NEUTRA'S *SURVAVAL THROUGH DESIGN* FOCUSING ON THEIR THEMES

末包伸吾\*

Shingo SUEKANE

This paper is intended to comprehensively and relatively grasp the content and its position of the book *Survival Through Design*, through a discourse on Neutra's 【Age Recognition】. The keywords of the subjects were sorted out as a number of items and examined from the viewpoint of the hierarchical composition of the meaning, by extracting the thesis which becomes the subject from his thesis, which leads to the policy and method. 【Age Recognition】 shown in Neutra's book is consisted of the second level of five items of "Environment", "Civilization", "Style", "Construction", and "Beauty". "Environment" consists of [natural environment] and [artificial environment]. "Civilization" is [technology], [technology / machine], [standardization], [product / material], [performance], [Maintenance], and [User / client]. In this paper I mainly focus on the items of the second level, from the items which are particularly mentioned and exhaustively examined in each chapter.

**Keywords :** Richard Neutra, *Survival Through Design*, *Recognition of Age*, *Architectural Theory*

リチャード・ノイトラ, 『サヴァイヴァル・スルー・デザイン』, 時代認識, 建築理論

## 1. はじめに

本稿は、ロサンゼルスにおける近代建築の形成及び発展過程に関する研究として、ロサンゼルス近代建築を先導した建築家ルドルフ・M・シンドラーやリチャード・ノイトラらの建築思想ならびに建築作品の特質の析出を企図する検討<sup>注1)</sup>の一部である。

リチャード・ノイトラ(Richard Neutra, 1892-1970)は、ロサンゼルスを拠点とし、独立住宅を中心に、集合住宅、公共建築、都市計画にいたる広範で質の高い設計活動を行い、数々の著書を残した建築家として、フランク・ロイド・ライトとともにアメリカ近代を代表する建築家とされる。1929年に竣工したノイトラの最初期の作品「ロヴェル邸」は、「インターナショナル・スタイル」の実例の一つとされ、ロサンゼルスという、降雨が少なく高温という環境において、当時の技術の下、人々が健康で快適であり続けられる空間の創出を企図したものであり、そのことは、本作品の別称「健康住宅」からも伺える。さらに、彼の代表作品「砂漠の家(カウフマン邸(1946))」などに示されるように、ノイトラは終始、近代化の進展する状況のなかで、厳しい環境条件と建築とを如何に呼応させるかに意を払い続けてきた。

特に彼が1954年に著した『Survival Through Design』は、彼の

それまでの建築活動、「ほぼ人生に相当する(almost a lifetime)」<sup>注2)</sup>

ものを総括し、自身の建築思想を「survival」というタイトルのもとに示したものであり、フランス、ドイツ、イタリア、そしてスペインでも訳出された彼の主著<sup>注3)</sup>とされる。しかし、注3に示したクルフトの言及どおり、「読むことが困難な繰り返しの多いもの」でもあり、それを明確に整理し、総体的かつ相対的に把握することで彼の建築思想の一端を開示すべく、本稿の構想へと至った。

フォーティ<sup>注4)</sup>によれば、約500年続いた、建築における「自然」というカテゴリーへの思考が唯一中断されたのが、20世紀初期から中期にかけてであり、彼の言に従えば、モダニズムの全盛期において「自然」は放置され、1960年代以降の「自然」は環境保護運動を下にし、概念的には「作りなおされた」ものである。このモダニズムの全盛期において「自然」への検討がなされたものこそ『Survival Through Design』なのである。それまでのアメリカにおいては、ホーレーショ・グリーノーやルイス・サリヴァンにおける、19世紀から20世紀初頭にかけての論考群があり、その後は、フランク・ロイド・ライトにより自身の建築思想として数多くの著作が上梓された。しかし、彼らはいずれもアメリカでは東海岸を中心に活動し、彼らの「自然」への思想も20世紀初頭における見解

\* 神戸大学大学院工学研究科建築学専攻 教授・博士(工学)

Prof., Dept. of Architecture, Graduate School of Engineering, Kobe University, Dr. Eng.

にとどまり、同時に、アメリカ本土はもとより、アメリカ東海岸の地域性への対応も色濃く反映されていると考えられる。一方、アメリカ西海岸の近代建築を先導した建築家が、シンドラーとノイトラであることは周知のことであろう。論考の発表が少なかったシンドラーに比べ、ノイトラは、多数の著書を出版し、彼の建築観を広く示していた。こうしたことから、彼を、アメリカ西海岸を中心に、その独自の環境下での思想形成を行った主導的な建築家であり、同地の地域性に応じた建築観を網羅的に披瀝した建築家と位置づけることもできよう。

本稿は、ノイトラの『Survival Through Design』に示された全論考を対象に、主題となる言説を抽出し、その主題のキーワードをいくつかの項目として示し、これらを主題の内容の階層構成という視点で分析し、それに即して、ノイトラの『Survival Through Design』における建築思想を、総体的かつ相対的に把握することを目的とするもので、特に本稿ではその主題の一つ、彼の時代認識に関する思想の特質を検討する。筆者は、これに準じた視点や分析方法により、注1で示したシンドラーの建築思想を、彼の時代認識や空間構成の理念や方法、彼が提起した「空間建築」について検討を行ってきた。本稿は、こうしたシンドラーとともに生涯に渡りロサンゼルス近代建築を先導したノイトラについて、シンドラーの建築思想の分析の視点や方法に準ずることで、ノイトラの建築思想の特性の一端の開示だけでなく、将来的にはシンドラー等との比較検討を行い、広くロサンゼルス近代建築の建築思潮として、その特性を導くことも企図している。

ノイトラに関する既往文献として、まず Boesiger 編集による3冊の作品集<sup>注5)</sup>は、ル・コルビュジェの作品集に次いで発刊されたものであり注目に値する。また、欧米をはじめ、我が国においても、近代建築家の作品集のシリーズが編纂される時、ノイトラが選ばれることが多く、ニューヨーク近代美術館においても大規模な展覧会が開催された。こうした事実も、ノイトラの近代建築における重要性を示すものであろう<sup>注6、7)</sup>。しかし、こうした作品集における解説や、建築関係の雑誌等におけるノイトラの作品を数作品取り上げ論考したもの<sup>注8)</sup>を除き、ノイトラに関する主要な既往文献としては、現在のところ、Hains によるノイトラの生涯やその作品を年代を追って記述していくもの<sup>注9)</sup>や、ノイトラとシンドラーの関係を、彼らの書簡に求めた McCoy の著作<sup>注10)</sup>を主とするにとどまる。さらにノイトラの建築思想と建築作品について、ノイトラのウィーンでの自己形成期にその源を求め、心理学および精神分析学的視点から検討し、その結果、ノイトラの特徴を「ムードを創り出す」ものとする独自の視点で現代的な位置づけを示した Lavin による検討<sup>注11)</sup>が示されている。Lavin が同書で、ノイトラの思想の基軸として『Survival Through Design』に度々言及している点では、筆者とも軌を一にする。しかし Lavin による著作がノイトラの生涯を対象としているほか、その目的や視点の独自性もあろうが、検討が『Survival Through Design』という書名を主としており、ノイトラの言説は、検討の補強のために断片的に扱われているという感を逃れない。従って、Hines や McCoy の著作同様、ノイトラの主著である『Survival Through Design』の内容やその意義を十全に開示せんとする本稿とは、その目的や視点・方法が異なると考えられる。わが国では、ノイトラの住宅建築の空間構成に関する筆者や那

須の研究<sup>注12)</sup>、玉田によるノイトラの初期の建築思想に関する研究<sup>注13)</sup>がある。特に玉田はノイトラの初期におけるテクノロジーを含む技術観を析出しており、本論考での検討に示唆を示すものである。しかし、ノイトラの全盛期の、しかも主書である『Survival Through Design』を対象に、ノイトラの建築思想の特性を、包括的にその思想の内容とそれらの特性を導こうとする研究は、依然として行われていないと言えよう。

建築家の思想を、その言説に即しながら検討する方法は数多く試みられている。本稿では、序章を加えた48章の約400ページにわたる大部の著書『Survival Through Design』を対象に、その内容やその位置づけを総体的・相対的に把握するため、奥山らの一連の研究を参考<sup>1) 2)</sup>にした。具体的には、『Survival Through Design』から、ノイトラの時代認識に関する言説、空間概念、さらに建築家の具体的展開としての方針や手法にいたる、彼の論考から主題となる言説を抽出し、主題のキーワードを、KJ法を参考に、いくつかの項目として整理するとともに、意味の階層構成という視点で検討した。抽出した主題は、章毎にナンバリング（一部は2つの主題があるため枝番を付加する）を示す。これにより48章から1267の言説が主題として抽出され、それらの主題に基づくキーワードは61の項目に整理され、主題の内容を意味の階層性の視点から検討した結果、全体では、第1から第5水準の項目に分類された。中でも、第1水準としては、「時代認識」、「生理学的空間 (biological space)」、「建築家としての職能」の3項目が導かれた。

本稿では、この第1水準の項目【時代認識】、その中でも、まず《環境》と《文明》について検討を行うものである。以下<sup>注14)</sup>、第1水準の項目は【】、第2水準は《》，第3水準は[]により表記する。

## 2. 『Survival Through Design』を構成する主題とその内容

ノイトラの『Survival Through Design<sup>注15)</sup>』に示された【時代認識】は、《環境》、《文明》、《様式》、《構築》、そして《美しさ》の5項目の第2水準の項目から構成されている。

《環境 (127 言説)》は、[自然環境 (53 言説)] と [人工環境 (74 言説)] からなる。《文明 (164 言説)》は、[テクノロジー (46 言説)]、[技術/機械 (44 言説)]、[標準化 (15 言説)]、[製品/材料 (10 言説)]、[性能 (13 言説)]、[メンテナンス (4 言説)]、そして [ユーザー/クライアント (32 言説)] の7項目からなる (表1<sup>注16)</sup>)。

本稿では、第2水準の項目を主に、特に言及が多くかつ各章に網羅的に検討がなされている項目から、まず前提的な概念規定である、《環境》と《文明》についてその内容を検討する。他の第2水準の項目である、《様式 (83 言説)》、《構築 (45 言説)》、《美しさ (25 言説)》については、本稿との関係も含め、次稿で詳細に検討する。

### 2-1. 《環境》

先述したように《環境 (127 言説)》は、[自然環境 (53 言説)] と [人工環境 (74 言説)] からなるもので、ここでは、[自然環境] と [人工環境] とを明晰に区分し、[自然環境] をデザインの先例とすること、[人工環境] の有する建築空間のもつ大きな影響力について言及がなされる。言説数の点からだけではあるが《文明》に近い数の言説が抽出されていることは、ノイトラの【時代認識】における《環境》の重要性を示しているよう。

表 1 ノイトラの時代認識における環境と文明への言説（章中の枝番は文節内での項を示す）

Table 1. Texts by Neutra regarding Environment and Civilization under the context of the Recognition of the Age

章	時代認識								
	環境		文明						
	自然環境	人工環境	科学/テクノロジー	産業/技術/環境	標準化/画一性	製品/建築材料	品質/性能	メンテナンス	消費/ユーザー/ライフ
0									
1	0,1,7	8,9,10							
2	18,22,23	5,7,9,10,25,26,27-1,27-2,28,31-1,32	29,30,31-1,32						27-2
3		7,8	10,11						6
4	5,13	0,2,3,4,6,13	1,14,15						
5	0,20,22-2,24,25,26,28,30,39,40	17,21,22-1,42	2,3,5,7,8,9,12,15,16,19,24,26,27,29,36,37,43,45	4,21			6		7,11
6		8	1,2,3,4,22	31,38		11,33,34,35	0,35,36,37		
7				3,4,5,7,8,11,12,20,21,24	7,10,11,13,14,15,16,17,18,19,20,23,24	30	0,2,4,5,6,9		1,2,6,9,30,31,32
8		19		0,2,3,13,14,21,32	1,2	5,6	15,16	17,18,26	11-2
9									
10	0,1,2,5,6,8,28	3,4-1,4-2,5,6,10-2,12,13,14,23	19			7			
11		19	6	16					2,18-2
12	0,3,4	1,10				5			
13			0	,2					
14									7,8
15	1,10,28	28							
16	6								
17	10-2,11,12,13,14,15,16								
18									
19		4,5	2,8,9						
20		15,16		8					
21		0,11-2,24,28							
22		1	9,10,11						
23		18							
24	0,13,14-1,14-2,16-1	14-2,18							
25									
26									
27	7			3					
28	9			10-1					
29									
30									
31		24	32						26
32		11							
33									
34	14-1	2,14-2							16
35	2-2	1,2-1,7-2		9,10					
36				10-2					5,12
37									16,20,23
38									2,3,5
39									13
40		10							
41		5,6,9		17		17			7,13
42				18,19					
43									
44	23,24	3-1,3-2,6,21,23	11	18					2,3-1
45			3						
46	29,32,105	1,33-1,33-2,105	96	1,97,100,101,102,103,104,107,110,111,113				95	
47			2,4						8

2-1-1. [自然環境]: [自然環境] への言説からは、自然環境と人工環境の差異、自然環境への態度、デザインの先例としての自然環境という、主たる3主題が析出された。以下はこれらの主題ごとに、ノイトラの言説の主たるものを抽出の上、検討を加える。

#### 1) 自然環境と人工環境の差異

The velocity differential of those two processes ( the natural scene and Man-made environment 筆者加筆) is fraught with dangerous friction. (自然と人工の二つのプロセスにおける速度の差異は、危険な摩擦に満ちている。) [4-13]

In nature, growing and functioning are inseparable, mutually determined, and simultaneous life processes... In human creations, being produced and functioning always follow upon each other, and full harmony between the two is really never accomplished. (自然において成長と機能は、分離できない、相互に決定される生命のプロセスにある。(筆者略)人間の創造物においては、生産と機能は常に相互に依存し、両者の完全な調和は達成され得ない。) [10-2]

これら2言説から明らかなように、ノイトラは、[自然環境]と[人

工環境],をまずは,近代化の急速な進展による,それらの進捗の速度に差異を見出し,ついで[自然環境]を成長と機能の調和に,[人工環境]を生産と機能の不調和として対比的に捉えていることがみてとれる.こうした態度は決してノイトラ独自のものではないであろう.しかしノイトラは[自然環境]および[人工環境]ともに,「機能」という概念を提起し,それらの差異を示していること,ひいては,ノイトラにおいて「機能」による調整が後の課題となることを指し示しているものである.

## 2) 自然環境への態度

One does not have to be an out-and-out environmentalist to be concerned about the baleful influence of such man-made surroundings. (人は,人工環境からの有害な影響を懸念する,徹底的な環境保護主義者になる必要はない.) [4-5]

We have seen that nature can be interpreted by human brains as functional and orderly...In this view, on this level of mental functioning, all the phenomena of nature seem purposefully interrelated. But sometimes we feel we must temporarily abandon the effort to understand the world in such terms. Then, for an interval, we experience a peculiar mental relaxation. (我々は,自然を,人間の脳を介して機能的かつ秩序あるものとみなしてきた.(筆者略)この見地から,精神的な機能のレベルにおいては,あらゆる自然の現象は,目的を持って相互に関係しているように思われる.しかし時々,我々は世界をそのように理解することを一時的にでも諦めなければならないように感じることもある.そして,時間を置いて,我々は特殊な精神的安寧を経験することとなる.) [17-10-2]

Nevertheless, California is granted some co-ownership; the *genius loci* is given a specific share of influence and control. (それにもかかわらず,カリフォルニアにはある種の共同性が付与されている.「ゲニウス・ロキ」は独自の影響と制御によりもたらされる.) [35-2-2]

ノイトラは,「徹底的な環境主義者」になる必要がないと述べる.一見矛盾するようにみてとれるこの言説は,逆に「自然」を保護することだけが,「環境保護主義者」という名のもとに「自然」と人間が切り離されることへの懸念を,つまり「自然」から「みいだす」ことの必要性を示すものと解されよう.「みいだす」こと.それは次の言説で詳述される.一時的であれ諦めることなく自然現象の相互関連性を「みいだす」こと,そうした「態度」により,人間は「自然」を,精神的安寧をもたらすために不可欠なものであるとするのである.その上で,ノイトラは特に,カリフォルニアにおける共同的な「ゲニウス・ロキ」に,その独自性を「みいだし,それとともに,その独自性との対峙を,彼の「自然環境への態度」として示すのである.

## 3) デザインの先例としての自然環境

NATURE'S FORMS GROW QUITE DIFFERENTLY but they often are models for those designs which man produces, accepts, and, before long, strangely tires of. (自然の形態は全く異なった成長をする.しかしそれらは人が,生産し,受容し,すぐに飽きもする,デザインのモデルともなるのだ.) [10-0]

前述のフォーティが述べるように,「自然」はかねてよりデザイン

のモデルとして利用されてきた.ノイトラがここで述べるのは,「自然」を一元的に捉えるのではなく,「自然」それぞれへの個性への注視という態度のもとに把握に努めようとしていることにあり,それを彼の一つの特徴とすることができよう.この言説には,エミール・ゾラ(Émile Zola)が主張した,自然への回帰を感傷的ではなく科学的手段を持つて行う必要性へのノイトラの呼応ともみてとることができる([5-24, 25, 26, 30]).ゾラは,この「自然」の個性を科学的手段として捉えると同時に,「自然」だけで物理的なシェルターを創出することが,その強度の問題から困難であることも指摘している([5-39]).

2-1-2. [人工環境]: [人工環境]への言説からは,人工環境の現状,人工環境の持つ影響力,人工環境への責務という,主たる3主題が析出された.以下は,これらの主題ごとに,ノイトラの言説の主たるものを抽出の上,検討を加える.

### 1) 人工環境の現状

The Eternal City bears striking testimony to the shipwreck of a multitude of plans and designs that have forever remained frustrated fragments. In the present, things may be different from what they were in the past, perhaps, but certainly not better. The controversial, calamitous character of contemporary towns... (永遠の都市(ローマ)は,頓挫した断片群として残されてきた,多様性ある平面やデザインの破滅という驚愕する証拠を有している.現在は,過去のそれとは異なっている.しかし,たぶん,決して良くなっているのではないのだ.現代都市の,問題の多い,悲惨な性格(筆者略).) [1-8]

Conditions closer to our natural wants can be regained in our constructed environment if productions are physiologically probed. (もし生産が生理学的に精査されるようになれば,自然とより密接なものとしての構築環境を再び手に入れることができる.) [11-19]

ノイトラの人工環境への視野は,ローマをその起源とするが,その評価は否定的なものである.そして彼が置かれている状況下でも,たとえ彼が,1920年代から30年代の著書で,アメリカにおける建設システムへの賞賛を行っていたとしても,それから四半世紀をへた時点では,ローマとは時代こそ違え,現代都市が,断片のままにあるという悲惨な状況に据え置かれていることとして認識するものである.そこで断片性を解決するために,彼が仮説的に提示するのが,「生理学」である.ノイトラにとっての鍵語「生理学」がここで解決策を示す視点として提示される.

The primary interest is in what seems to remain 'constant' in these human consumers; it will be reckoned with as firm ground. (消費者の間では,(建築が)「一定のもの」として存続するようにみえることが主たる興味であり,それは,固定的なものと考えられている.) [44-3-1]

Our curiosity proceeds to what may be modifiable in human make-up and to what possibly should and could be changed in everyday requirements. (我々の好奇心は,人によって調整され,日々の要望に応じることのできる変化を加えることのできるというように進展する.) [44-3-2]

先に示したノイトラの主張する「生理学」の適応には,様々な課



題がある。それは上述した、建築の歴史的展開とともに、当時における居住者（消費者）の「人工環境」に関する固定観念があると、ノイトラはみているのである。その上で彼は主張する。それは、「調整」や「変更」、「変化」であり、そこには、「人工環境」をより望ましい形に可変できることを、自らの環境のために「みいだす」ことがその要因となり得るとするのである。

## 2) 人工環境の影響力

There it is often assumed that things are removed from design influence and determined by constitutional equipment and genes. What seems hereditary, however, is often influenced by the prenatal, the uterine environment, and the condition of a child-bearing mother is not independent of the situations in which she finds herself for the act of birth. (事物は、デザインの影響力からは離れ、体質的なものや遺伝子から決定づけられているとされることがよくある。しかし、遺伝的にみえるものも、胎児の時期や子宮の状況、そして子供を抱かえる母親の状況に影響されることがしばしばあり、そうした状況は、出産という行為と無関係なものではない。) [31-24]

ここにみいだされるのは、1) で述べた人工環境の現状の有する影響力の大きさへのノイトラの認識である。すなわち人工環境の現状そのものが時間を伴い、それより人間の最も本質的なものである遺伝として継承されていくこととともに、それらがデザインとの関係性を創出しがたい状況であるという認識である。遺伝という極めて「自然」なものそのものが、ノイトラのいう「自然」と切断されていることへの危惧を示しているものと解することができよう。

## 3) 人工環境への責務

Yet, there remains an urgent inescapable problem staring us in the face; today more than ever we seem confronted with the anxious question as to whether the human race is fatefully self-destructive and thus destined to perish from the earth, or whether by our own design we may attempt and assure our survival. (しかし、喫緊の逃げおせない問題に我々は直面している。今日、我々が懸念する問題に直面する以上に、人類は、運命的で自己破壊的に、地球から消滅させることを運命づけられているのだ。さもなければ、我々のデザインによって、我々のサヴァイヴァルを企図し確実にすることだ。) [2-25]

What are the means of willful design and what are its ends, provided we can make these means work? (我々にとって望ましいデザインという手段は何なのか、その目的は何なのか。その手段を活かすためには、何が与えられているのであろうか。) [2-26]

ノイトラの、人工環境の現状やその影響力への洞察は、人類の消滅の危機に瀕しているという見解へと、つまり、現在われわれが直面している地球環境保全という課題と結び付けられる。そこから導かれるのが地球環境に対する責務なのである。そしてその責務の遂行も容易なものではないという認識が、ノイトラの「サヴァイヴァル」という鍵語を提示させることになるのである。そして彼は、その「サヴァイヴァル」達成のための手段と目的を、自身の設計への課題とし、思索と実践を深めることとなる。

## 2-2. 《文明》

《文明 (164 言説)》は、[テクノロジー (46 言説)], [技術／機械 (44 言説)], [標準化 (15 言説)], [製品／材料 (10 言説)], [性能 (13 言説)], [メンテナンス (4 言説)], [ユーザー／クライアント (32 言説)] の 7 項目からなる。《文明》に対する言及では、[テクノロジー] の進歩をデザインにもたらすことから、現代的な社会では、その進歩に伴う[技術／機械]の進展が必然であり、[標準化]が不可欠であること、また、その産物としての[製品／材料]や[性能]のあり方、新たな[ユーザー／クライアント]の出現の必要性にいたる分析がなされている。これは彼の【時代認識】への関心の広さを示すものといえよう。

### 2-2-1. [テクノロジー]

Yet another attitude has come increasingly to assert itself in everyday design at its best. (しかし、日常の生活を最高のものとするということを主張する、別の傾向が増加するようになった。) [5-45]

But such detachment is justifiable only as a means, not as an end in itself. (しかし、そうした(科学的な)分離は、それ自体が目的ではなく、手段にすぎない。) [47-2]

[テクノロジー]に関する言説において、他所で、彼は、過去には[テクノロジー]が大衆の信仰と結合され、その結果、都市環境に混乱を生じさせたことへの観察を示した後、ゾラなどの自然主義からの影響もあり、芸術家として[テクノロジー]との近接のあり方を検討する。社会に近代化をもたらした大きな要因である[テクノロジー]。ノイトラは、[テクノロジー]自体が生活にもたらす変容への期待とそのデザインへの適応への関心を示しながらも、同時にそれは生活にとって手段に過ぎないと断ずる。

### 2-2-2. [技術／機械]

#### 1) 技術の進展

Standardization and a functional concept of what a thing is or rather how it ought to perform are unavoidable in an industrialized world. (工業化された世界において、標準化と、物事がどのように稼働するかという機能的な概念は、避けることができない。) [7-8]

It is true that the cost of suitable materials may at first be high as it is in the case of all innovations; but if such materials are in increasing demand, a way is found to manufacture them at reasonable prices. Such demand is all-powerful motivation of an industrialized civilization. (全ての発明において、適切な材料の価格が初期には高価であることは事実である。しかしそうした材料も、需要が増加すれば、適切な価格となる途が見出される。そうした需要こそ、工業化文明における最も力強い動機となるのだ。) [11-16]

近代における工業化がもたらす技術の進展は、世界的な規模でその広がりをみせる。それによる製品の標準化の達成度とその効果を、ノイトラは、他方で人間性を喪失させる契機にもなりうるとして、慎重な態度を保持する。同時に、需要を喚起するものとしての価格も視野に入れている。このことにより、消費と需要、安定した技術の進展という、3つの要素の連関が、近代の資本主義システムとなってきたことを、彼は述懐するのである。

#### 2) 機械化の影響

The home catalogues of mail-order firms showed more models and variable trimming than the company could handle economically; and sales correspondence was carried on in plain envelopes, lest the purchaser be found out by his neighbors and taunted for acquiring a house that was not individually built. But would such have meant a specific fit? (メール・オーダー式住宅のカタログは、建設会社が経済的に建設する住宅に比べ、多様なモデルと様々な装飾を提示する。セールスは封筒で届けられ、消費者は自宅が個性を持って建てられていないことを、近隣や知り合いに知られることもない。果たして、この住宅は特別な要件に応じられているだろうか。) [7-12]

機械化による標準化は、建築のあらゆる部分において展開されるが、その最も極端な事例が、メール・オーダー式のカタログ販売による住宅の供給であり、アメリカの量販店シアーズが主となって展開された。カタログ販売は19世紀終盤に開始され1930年代後半まで行われた。シアーズの目論見は生活の全てに関わる多様な日用品を、機械化により可能となる安価で提供するもので、ここに機械化による影響の典型的な姿を認めることとなる<sup>注17)</sup>。住宅のカタログ販売は、ノイトラの活動時期とも重なる。彼は、一見、多様で様々な装飾により個性を表出するメール・オーダー式の住宅に、その根底に機械化を通じた標準性ともいえるものがあることから、特別な要件、中でも地域の特性に応じられないとして、これを退ける。

Expanding industry and building activity have not created uniformity; on the contrary, they have tended to destroy a wholesome measure of uniformity which had existed earlier. (工業や建設業の拡がりには、統一感を創出することができなかった。反対に、それらは以前には存在した、統一感のための有益な尺度を破壊する傾向にある。) [7-24]

The handling of our technical problems becomes more matter-of-fact, less involved in ritual, charm, or prayer. (我々の技術的な問題の取り扱いには、より現実的なものとなり、儀式、魅力や祈りといったものとの関係は薄れた。) [13-2]

ここで標準化と統一感の明確な差異が示される。例えば、ノイトラが深く感銘を受けたアメリカ南部のブエプロの集落などのように、近代以前からの集落などにみられる、形態、素材、スケールなどが創出する統一感という「有益な尺度」は、統一性をなにより創出しやすい標準化が、[7-12]のように、標準化の進展による多様化により、街と都市を作り出す作法や、儀式などの生活行為自体を変質させることとなる危惧をノイトラは示すのである。

## 2-2-3. [標準化]

### 1) 標準化への危惧

There was general fear that uniformity might spread over the globe and destroy the joy of living. At any price, the monster monotony was to be kept at bay, even by far-fetched means. (統一性が世界に拡がれば、住むことへの愛着が失われるという一般的な恐れがある。どのような対価を払っても、たとえ不自然な手法が用いられていたとしても、非道な単調さというのは窮地にあり続けるはずだ。) [7-13]

Design resisted the trend to standardization in the name of so-called Individualism... These were merely mimicked; a

common flimsiness was genuinely of our own speculative age.

(デザインは、いわゆる個別主義の名のもと標準化に向かうことに抵抗した。(筆者略) これら(ハリウッドの住宅に数多く見られる様々な国の様式)単に模倣されただけのものであって、それらに共通する浅はかさは、われわれ自身の不確かな時代では確固たるものがある。) [7-10]

[7-8] (本稿 2-2-2. 1)) での言及が再度抽出されるように、ノイトラは、標準化という動向は避けられないものではあるとしながら、その単調さを含め、その弊害を重ねて指摘する。では、個別的なデザインを施すことで、問題は解決されるのか。ここで個別主義というもう一つの弊害を指摘している。すなわちハリウッドの富裕層のための住宅群は、それぞれに個別的なデザインがなされている。その点では、標準化という課題は、一見回避されているかもしれない。しかしノイトラが述べるように、一見、個別なものなのであっても、現実には、他の様々な地域に見られる住宅を、様々に模倣したものに過ぎないものであり、それらを本物として認識することに、ノイトラは警句を発するのである。

If they criticized it at all, their censuring was mild compared with their denunciations of the dreadful monotony that would result from industrial standardization in architecture. (もし彼らがそれ(安価な粗悪品)を完全に批判したとしても、建築における工業的な標準化がもたらす、ひどい単純さへの公然たる非難に比べると、その非難はずっと穏やかなものであった。) [7-11]

It is a kind of mass standardization of housing far beyond anything ever attempted or conceived in the industrial age. (集合住宅の大規模な標準化などは、工業化時代における企図や構想をはるかに凌ぐものである。) [7-17]

これまで示してきた標準化/画一性へのノイトラの懸念を、建築との関係において完結に示すのが上記の言説である。日常の生活を取り囲む品々、それらがたとえ粗悪品であったとしても、より精緻に組み立てられた工業化のもとでの標準化された建築が数多く創りだされた結果としての環境に対し、厳しい視座を保持する。

### 2) 標準化の可能性

The appearance of each of these places is most often one of a natural uniformity, and not of a wild variety of production methods. Identical roofing material in given region naturally calls for an identical roof slope. (これらの場所のそれぞれの見え方は大抵の場合、自然な統一感を有しているが、それは製造方法の多様性によるものではない。屋根の材料の主たるものは、その地のものであり、それによって主たる屋根の勾配が決められる。) [7-14]

A wise standardization reduces production problems and the number of individual 'set-ups' and operations. (賢明な標準化は、製造上の問題や個別の「組み立て」や作業を減らす。) [8-1]

建築における標準化という問題は、常に長短を伴うものであり、ノイトラもその問題に対して自覚的であったことが、本小節で披瀝される言説群からも明らかである。ここでは、集落の景観の統一感が、地域の素材から決定づけられる屋根勾配によりもたらされることに可能性を見出している。先のハリウッドの住宅群への地域性を欠如したことによる「真正」の喪失との言説と合わせると、ノイト

ラが地域の特性をいかに重視していたかが明らかとなろう。そして地域の特性を勘案した標準化と、それによる建設水準の向上こそ、ノイトラが、「サヴァイヴァル」のために希求するものなのである。

#### 2-2-4. [製品／材料]

The glorious ‘unity of material’ was a thing of the past. The ‘raw materials’ were no longer raw, but themselves end products of long drawn-out and widely scattered manufacturing processes. (壮麗な「素材の統一」は過去のものとなった。「原材料」はもはや生のものではなく、長い間鍛錬され広く拡がった生産過程がもたらす製品となった。) [6-33]

本稿2-2-2において検討した[技術／機械]でみられたノイトラの観察として、近代化の進展とともにある工業化がもたらす工業製品の普及という状況がここでも披瀝される。そうした製品の自身の建築への採用への積極性という普遍性への呼応と、それと同時に「生」の材料の重要性という個別性への視座、さらに、それら工業生産品と生の材料双方を用いて、ノイトラ自身が、新たな「素材の統一」を志向していることを示唆している点が重要であろう。

It must survive on the open market, prove its mettle against competition. But then our man-made surroundings, our human products will in the last analysis and over long periods have to demonstrate their wholesomeness not only for the individual consumer but to aid the survival of the race itself.

(競争に対し気概を示すことで、開かれた市場で生き残らなければならない。しかし我々の人工環境において、我々の製品は、要するに、長い時間をかけて健全なものであることを、個人の消費者だけでなく、人類そのものを生きら得させるための補助を示さなければならない。) [10-7]

上述したことと同様に、資本主義の展開のもとでの工業生産品の普及への危惧と、それとともに「生」の材料の使用の適切性を主張しているが、その主張が、人類そのものの「サヴァイヴァル」のために必要であると位置づけている点に、すなわちノイトラの「サヴァイヴァル・スルー・デザイン」にあって、素材が、その重要な一要素であることを示している。

#### 2-2-5. [性能]

Also in neighboring fields, quality specifications have been replaced by performance specifications, that is, by a description of the performance capacity and operational objective... What is actually given him or what he asks for from the supplier’s agent is a performance guarantee. (関連領域においても、品質の仕様が、性能の仕様に、すなわち、性能の能力と操作の目標の説明書に取って代わられた。(筆者略) 実際に付与され、また、供給者から要望されるのは、性能の保証なのである。) [6-36]

ノイトラは、品質(quality)と性能(performance)を明確に区別する。近代の工業化が可能とした機能性が重視される性能。それへの視座とそれとともにある抵抗は、先の[製品／材料]で示された「生」の材料という品質と、工業化の下にある性能の拮抗の中に、彼の建築が存在することを示唆しているよう。

#### 2-2-6. [メンテナンス]

Eternity without maintenance was here the aspiration. (永遠

にメンテナンスの必要のないことが熱望されてきた。) [8-26]

And so to make a change has sounded crazy to many a ‘practical’ man. (変化を創出するために、数多くの「実務的な」人々を夢中にさせているようだ。) [46-95]

「生」の材料はメンテナンスを伴う。それに比べ、工業製品という材料は、その性能上、メンテナンスが回避されることも目的に製品を生産し世に送り出す。メンテナンスが回避されるという性能によりもたらされる安定・安心感が、住宅デザインに無用な「実務的な」変化をもたらしている。そうしたノイトラの観察は、本節の全体に通底するものである。

#### 2-2-7. [ユーザー／クライアント]

And never must we lose a sincere, enlightened interest in the ultimate consumer – our species as a whole (究極の消費者に、我々は全体のもとにあるということについての、誠実で啓発的な興味を失わせてはならない。) [2-27-2]

We have keenly felt the need to probe into the general background of design and to search for the methods that ought to make its activity safe and sound for its vast consumership.

(多くの消費者のための安全で健全な活動のための方策を、デザインし探求するという状況にあることを証明する必要があることを感知するべきである。) [44-2]

「全体のもとにあること」、それは、自然・街・建築・人が一つの調和をなすことであるとノイトラは言う。技術の進展がもたらした、質が高くメンテナンスも不要な生産品としての住宅は、人を、そうした自然や街、さらには建築による全体性からは分節される状況におかれることとなる。そうした状況への危惧がノイトラを啓発へと向かわせるのである。さらにそのためには、建築家が、建築を「全体性」を探求しながらデザインすることこそが求められていることをあらためて主張する。

### 3. 小結

フォーティが明晰に整理したように、過去、様々な検討がなされ、常に主題で在り続けた「自然」と建築あるいは芸術との関係も、20世紀前半には「自然」という主題から、「機械」がそれに取って代わる。そうした時代にあって、ノイトラが何に対して「Survival」しようとしていたのか、その具体的な内容と意義を検討する一部をなすのが本稿である。

本稿は、ノイトラの『Survival Through Design』から抽出された3つの第一項目の主概念【時代認識】、【生理学的空間】、【建築家としての職能】のうち、【時代認識】の下部概念の5項目、《環境》、《文明》、《様式》、《構築》、《美しさ》を析出し、まず、特に言及が多く基礎的な概念ともいえる、《環境》および《文明》に対して検討を加えたものである。《環境》は、その下部構造が[自然環境]と[人工環境]からなる。《文明》は、[テクノロジー]、[技術／機械]、[標準化]、[製品／材料]、[性能]、[メンテナンス]、そして[ユーザー／クライアント]の7項目の下部構造からなる。これら下部構造への検討から、その上部構造である《環境》と《文明》についてのノイトラの思考が、下記のように導かれた。

まず、ノイトラの《環境》の概念については、彼は、「自然」と人間が切り離されることへの懸念を示し、「自然」から自然現象の相互



関係を「みいだす」ことの必要性と、それにより精神的安寧につながることを主張する。特に、「みいだす」ことにおいては、カリフォルニアにおける共同的な「ゲニウス・ロキ」の独自性をあげている点に特色があろう。同時にノイトラは「自然」が有する成長と機能に応じた、「自然」の構成要素それぞれへの個別性への注視の必要性を示し、[自然環境]に成長と機能の調和を「みいだす」ことを重ねて強調する。[人工環境]には生産（成長）と機能の不調和をみてとり、[自然環境]とは対比的に捉えている。ノイトラは[自然環境]から「みいだされる」機能を提起するが、これは一般の近代的な機能論とは異なるものであり、彼は機能を彼独自の「生理学」なそれとして把握し、それによる環境の「調整」「変更」「変化」を、自らの課題としている。

ついで、彼の《文明》についての概念としては、[テクノロジー]自体が生活にもたらす変容への期待と、そのデザインの適応への関心を示すものの、あくまで[テクノロジー]は手段にすぎず、同時に、その進展は人間性を喪失させる契機と断じている。中でも彼は、[テクノロジー]による「標準化」と地域の特性に応じる、つまり地域性という真正へとつながる「統一性」との間に明確な差異をみだしている。この「統一性」は、「標準化」による街や建築を作り出す作法や、生活行為自体を変質させることへの危惧であり、彼は、そのことに自覚的であった。そして、形態、素材、スケールなどが創出する「統一性」を、自身の「有益な尺度」として提示するのである。すなわち、ノイトラは、自然と人間性との相互作用の下に[テクノロジー]を位置づけていると言えよう。これはヴァルター・ベンヤミンによるテクノロジーの２段階（その第１段階は自然を征服しようとするもの）の２段階目と呼応するものでもある。

こうした《環境》と《文明》への検討から、ノイトラは、フォーティが述べる「自然」から「機械」への完全な変容を志向したのではなく、地域の特性（ゲニウス・ロキ）を勘案した「統一性」と「標準化」双方の相互作用こそが、ノイトラが主題とする「Survival」のための必要条件であり、人類の「Survival」のために「生」の材料の重要性という個別性と、標準化された材料を「有益な尺度」で援用するという普遍性への呼応の双方の「生理学」的調和を、その十分条件の一つとする視座を獲得するのである。

今後は、【時代認識】の下部構造であるに関する検討はもちろん、【時代認識】と同等の第一項目である【生理学的空間】、【建築家としての職能】に関する検討を行い、ライトと建築思想との比較検討も踏まえ、ノイトラの『Survival Through Design』の特性および近代建築思潮における位置づけの検討を行う予定である。さらに、その意味を、より文明論的にも検討する必要がある。それには、ルイス・マンフォードがサンフランシスコを対象とはするものの、そこでの地域性の展開を示した論考<sup>注18)</sup>や、ヴァルター・ベンヤミンによる近代化と文明および文化の問題<sup>注19)</sup>、そしてユルゲン・ハーバーマスによる近代技術と科学がもたらす生活社会への課題<sup>注20)</sup>などの包括的な検討も必要であろう。これらの事については次稿以降で詳細に検討を行う予定である。

## 謝辞

科学研究費補助金による研究成果の一部であり、謝意を評したい。

## 参考文献

- 1) Shin-ichi OKUYAMA, Shin YAMADA and Kazunari SAKAMOTO: Spatial Conceptions of Architects on Contemporary Houses in the Articles, Study on Design Theories of Architects in Japan, Journal of Archi. Plann. Engng, AIJ. No. 456, pp. 123-134, 1994.2 (in Japanese)  
奥山信一, 坂本一成ほか: 建築家の言説にみられる現代住宅作品の空間モデル, 建築家の創作論に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No. 456, pp. 123-134, 1994. 2
- 2) Shin-ichi OKUYAMA and Kazunari SAKAMOTO: Architectural Theories in “Shin-Kenchiku” after World War II, Thoughts on Housing and City, Design Themes, Spatial Conception by Contemporary Japanese Architects, Journal of Archi. Plann. Engng, AIJ. No. 477, pp. 101-108, 1995. 11 (in Japanese)  
奥山信一, 坂本一成: 戦後「新建築」誌における建築家の創作論: 建築家の住宅観・都市観・創作の主題・空間モデル, 日本建築学会計画系論文集, No.477, pp.101-108, 1995. 11.

## 注

- 注1)筆者は、ロサンゼルス近代建築の形成と発展過程に関して、シンドラーやノイトラの建築作品の空間構成や建築思想を中心に特質の把握を行ってきた。以下に、筆者による既報の検討を発表の順に示す。ルドルフ・シンドラーの住宅作品における空間構成材とモジュールによる空間構成法, 第 494 号, pp.261-267, 1997.04, 末包伸吾: 部屋の構成とシーケンス計画にみるルドルフ・シンドラーの空間構成法, 日本建築学会計画系論文集, 第 497 号, pp.221-227, 1997.07, 末包伸吾: ルドルフ・シンドラーの住宅作品にみる空間構成の類型とその移行, 日本建築学会計画系論文集, 第 518 号, pp.321-328, 1999.04, 末包伸吾: リチャード・ノイトラの住宅作品における空間構成材とモジュールによる空間構成法, 日本建築学会計画系論文集, 第 521 号, pp.277-283, 1999.07, 末包伸吾: 主題とその構成にみる建築家ルドルフ・シンドラーの論考の特質とその変遷, 日本建築学会計画系論文集, 第 627 号, pp.1155-1164, 2008.5, 末包伸吾: 論考の主題とその構成にみるルドルフ・シンドラーの時代認識, 日本建築学会計画系論文集, 第 638 号, pp.979-985, 2009.04, 末包伸吾: 論考の主題にみるルドルフ・シンドラーの空間構成の方針と手法, 日本建築学会計画系論文集, 第 673 号, pp.723-731, 2012. 03, 末包伸吾: 論考の主題にみるルドルフ・シンドラーの「空間建築」, 日本建築学会計画系論文集, 第 684 号, pp.509-517, 2013.02. なお本稿は、河野輝充氏(神戸大学大学院修士, 現大林組)との共同研究をもとに、筆者の責任により執筆を行ったものである。

- 注2) Hines, Thomas(1982): Richard Neutra and the Search for Modern Architecture, Oxford University Press, New York and Oxford, p.220.

- 注3) ノイトラの評伝を著し、ノイトラ研究の第一人者であるトーマス・ハインズ元 UCLA 教授も、Survival Through Design を彼の主著としている。Hines, Thomas(1982), p.193. また、近著の建築論に係る通史における Survival Through Design の位置づけだけをみても、建築論の全史を精緻にまとめた大部の著書、ハンノ・ヴァルター・クルフト, 竺覚暁訳(2010), 『建築論全史』, 中央公論美術出版, pp.665-666, においても Survival Through Design をノイトラの最も重要な建築論的著作とし、その概要を抄録するとともに、特にノイトラの思想における「生理学」を、その鍵語としてあげている点では、本論と検討方法は異なるものの視点の一致をみる。Survival Through Design をノイトラの主著とする同様の言及は、Harry Francis Mallgrave(2005), Modern Architectural Theory - A Historical Survey, 1673-1968, Cambridge Univ. Press, NY, p.334, ケネス・フランク・中村敏夫訳(2003), 『現代建築史』, 青土社, p.435.

以下にノイトラの著書を示す。なお、英語版があるものは英語版のみを記載している。

Neutra, Richard(1927): Wie baut Amerika?, Julis Hoffmann, Verlag, Stuttgart,  
Neutra, Richard(1930): Amerika: Die Stilbildung des neuen Bauens in der Vereinigten Staaten, Anton Schroll Verlag, Vienna, Neutra, Richard(1948): Architecture of Social Concern in Regions of Mild Climate, Gerth Todtmann, Sao Paolo, Neutra, Richard(1951): Mystery and Realities of the Sites, Willard Morgan & Morgan, New York, Neutra, Richard(1954): Survival Through Design, Oxford Univ. Press, New York, Neutra Richard(1956): Life and Human Habitat, Alexander Koch Verlag, Stuttgart, Neutra, Richard(1962): Life and Shape, Appleton Century Crofts, New York, Neutra, Richard(1962): World and Dwelling, A. Tiranti, London, Neutra, Richard(1971): Building with Nature, Universe Books, New York, Neutra, Richard and Neutra, Dion(1974): Pflanzen - Wasser - Steine - Licht, Parey Verlag, Berlin, Neutra, Richard(1977): Bauen und die Sinneswelt. Verlag der Kunst, Dresden, Neutra, Richard and Neutra, Dion(1980): Bauen und die Sinneswelt 2. Parey Verlag, Berlin, Neutra, Richard(1986):

Promise and Fulfillment 1919-1932; Selections from the Letters and Diaries of Richard and Dione Neutra, Southern Illinois Univ. Press, Carbondale, William Marlin ed.(1989): Nature Near: The Late Essays of Richard Neutra, Capra Press, Santa Barbara.

注4) エイドリアン・フォーティ(2002), 坂牛卓・辺見浩久監訳(2006), 『言葉と建築』, 鹿島出版会, pp.328-359.

注5) Boesner, Willy ed.(1951): Richard Neutra 1923-50, Verlag fur Architektur, Zurich. Boesner, Willy ed.(1959): Richard Neutra 1950-60, Verlag fur Architektur, Zurich. Boesner, Willy ed.(1966): Richard Neutra 1961-66, Verlag fur Architektur, Zurich.

注6) McCoy, Esther(1960): Richard Neutra, George Braziller, Inc., New York. 小山正和(1953):『国際建築家選 リチャード・ノイトラ』, 美術出版社, 二川幸夫・清家清・高瀬隼彦(1969):『現代建築家シリーズ リチャード・ノイトラ』, 美術出版社.

注7) ニューヨーク近代美術館では, ノイトラの展覧会を実施している. その展覧会用に著されたものがDrexter, Auther and Hines, Thomas(1982): Richard Neutra: From International Style to California Modern, Museum of Modern Art, New Yorkである.

注8) 主なものとして下記の著作をあげる. Neumann, Dietrich ed.(2001): Ricrad Neutra's Windshield House, Harvard Design School and Yale Univ. Press., Stephen Leet(2004): Richard Neutra's Miller House, Princeton Architectural Press, New York.

注9) Hines(1982). なお近年 Hains はロサンゼルス近代建築の通史を上梓している. Hines, Thomas(2010): Architecture of the Sun, Los Angeles Modernism 1900-1970, Rizzolli, New York.

注10) McCoy, Esther(1979): Vienna to Los Angeles, California Arts and Architecture Press, Los Angeles.

注11) Sylvia Lavin(2007): Form Follows Libido: Architecture and Richard Neutra in a Psychoanalytic Culture, The MIT Press, Cambridge, Mass., 金出ミチル訳(2010):『形態は欲望に従う』, 鹿島出版会, p.224.

注12) 末包伸吾:リチャード・ノイトラの住宅作品における空間構成材とモジュールによる空間構成法, 日本建築学会計画系論文集, 第521号, pp.277-283, 1999.07, 末包伸吾:配置計画および平面計画にみるリチャード・ノイトラの住宅作品の空間構成, 意匠学会デザイン理論, No.51, pp.17-30, 2007. 那須聖ほか:内部空間との関係にみる近代住宅の外部空間の構成に関する研究, 日本建築

学会計画系論文集, 第528号, pp.133-139, 2000.02, 那須聖ほか:内外空間の配置・配列構成に見る近代住宅の建物と敷地の関係に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第529号, pp.179-185, 2000.03, 那須聖ほか:機能空間の連続性による内部空間の連続性と住宅の開放性, 日本建築学会計画系論文集, 第555号, pp.177-184, 2002.05.がその主なものである.

注13) 玉田浩之, 石田潤一郎ほか:1920年代および30年代のリチャード・ノイトラの建築思想におけるテクノロジーについて, 日本建築学会計画系論文集, 第574号, pp.209-215, 2003.12, 玉田浩之ほか:リチャード・ノイトラの初期住宅作品における設計手法について, 日本建築学会計画系論文集, 第587号, pp.235-241, 2005.01, 玉田浩之:リチャード・ノイトラの建築観と日本, 日本建築学会計画系論文集, 第600号, pp.223-228, 2006.02.

注14)【時代認識】は第3水準までの項目からなる.

注15) 本稿での検討は, Neutra, Richard(1954): Survival Through Design, Oxford Univ. Press, New York, すなわち初版版を底本とし, 特記無き限り, 和訳後の数字は, 本底本の章・節を示す.

注16) 奥山による一連の研究は, 様々な建築家の論考を検討するため, 言説から主概念を中心に抽出し, その相関を示している. 本研究では, 一人の建築家の言説から, その主題と内容を検討する必要があることから, 表1のように一つの言説が2つの項目の内容を示唆している場合, 両方に言及したものとしている. 主題の項目をその水準とともに構造化する過程では, 多数にわたる項目を定性的なものとして, その水準や関係性を検討し, それらの項目と水準と関係性の抽出にあたっては, 筆者を含む複数人による複数回の検討を重ね, 恣意性を排除するように努めた. また, 言説は, その内容に応じて, 複数の項目に位置づけられるため, 重複を許容し, それゆえ総数が異なる場合がある.

注17) 奥出直人(1992):『アメリカンホームの文化史』, 住まいの図書館出版局, pp.168-182.に詳しい.

注18) 玉田浩之, 戦後アメリカにおけるルイス・マンフォードの地域主義をめぐる論争, 平成20年度日本建築学会近畿支部研究報告集, 計画系, pp.741-744, 2002.

注19) Brian Elliott(2011), 末包伸吾訳(近刊), 『建築家のための哲学者 ベンヤミン』, 丸善出版, で詳細に検討している.

注20) エルゲン・ハーバーマス, 長谷川宏訳(1970), 『イデオロギーとしての技術と科学』, 紀伊國屋書店

# STUDY ON RECOGNITION OF AGE ON ENVIRONMENT AND CIVILIZATION IN RICHARD NEUTRA'S *SURVIVAL THROUGH DESIGN* FOCUSING ON THEIR THEMES

Shingo SUEKANE\*

\* Prof., Dept. of Architecture, Graduate School of Engineering, Kobe University, Dr. Eng.

This paper is intended to comprehensively and relatively grasp the content and its position of the book *Survival Through Design*, as a discourse on Neutra's 【Age Recognition】. The keywords of the subjects were sorted out as a number of items and examined from the viewpoint of the hierarchical composition of the meaning, by extracting the thesis which becomes the subject from his thesis, which leads to the policy and method. 【Age Recognition】 shown in Neutra's book is consisted of the second level of five items of "environment", "civilization", "style", "construction", and "beauty". "Environment" consists of [natural environment] and [artificial environment]. "Civilization" is [technology], [technology / machine], [standardization], [product / material], [performance], [maintenance], and [user / client]. In this paper I mainly focus on the items of the second level, from the items, which are particularly mentioned and exhaustively examined in each chapter.

First, concerning Neutra's concept of "Environment", he shows concern about human beings being separated from "nature", and the necessity of "finding" the interrelationship of natural phenomena from "nature". In particular, it will be distinguished by the uniqueness of the collaborative "Genius Loci" in California. At the same time, Neutra shows the necessity of gazing at the individuality to each of the "nature" components according to the growth and function of "nature", "to find" harmony between growth and function in the "natural environment". In [artificial environment], he looked at production (growth) and discordance of function, and contrast with [natural environment]. Neutra raises "found out" "function founded" from "natural environment", which is different from the general modern functional theory, he said "function" to his own "biology". As a matter of fact, we have identified the "adjustment", "change" of the environment by ourselves.

Then, as a concept about his "Civilization", although [technology] itself shows the expectation for the transformation that life brings to life and the interest in adaptation of its design, [technology] is only a means, at the same time, its progress is obviously an opportunity to lose human nature. Among them, he finds a clear difference between "standardization" by [technology] and the "unity" that responds to the characteristics of the region, that is, it leads to the authenticity of regionalism. This "unity" is a concern for altering the way of making towns and buildings by "standardization" and the act of daily life itself, he was conscious of that. And he presented consistency created by form, material, scale etc. as his own "useful scale". In other words, it can be said that Neutra positions [technology] under the interaction of nature and humanity. This is also in agreement with the second phase of Walter Benjamin's technology two stages (the first stage of which is to conquer nature).

From the perspective of such civilization, Neutra is a necessary condition for "Survival" that Neutra is the subject, positive standardization of materials, and improvement of construction technology by the standardization taking into account the characteristics of the region. He acquired a viewpoint on harmony of both with the universality of recruitment and the individuality of the importance of the material of "raw" for the "Survival" of humanity for his architectural design.

(2016年11月15日原稿受理, 2017年5月11日採用決定)